

むかし、ひとりの旅人が、道ばたで小便をしながらふと下を見ると、白い骨が落ちていました。小便が、骨にかかっていた。旅人は、ふざけて、

「つめたいか」とききました。すると、骨が、

「つめたい」と答えました。

「温かいか」ときくと、

「温かい」と答えます。旅人は気味が悪くなって、急いでそこをたち去りました。すると、骨があとからついてきます。旅人はおそろしくなって、村の酒屋まで来ると骨にいいました。

「ちよつとここで待っていてくれ。酒を買ってきて飲ませてやるから」

旅人は、骨をそこに待たせておいて酒屋に入り、裏口からにげてしまいました。

何年かたったある日のこと、旅人は、またあの酒屋の前を通りかかりました。すると、酒屋の向かいに新しい酒屋ができていて、美しい女が酒を売っていました。旅人は、そこへ入って行って、酒を飲みながら、

「何年前か前、この店のたっているちよつどの場所で、みょうな骨をだましてにげたことがあるんだ」と話しました。女は、

「ああ、おまえだったのか。その骨はわたしだよ。今までおまえを待っていたんだ」というと、たちまち九尾のきつねになり、旅人にとびかかって食ってしまいました。

骨に小便などひっかけるものではないというおはなし。

\* 九尾のきつね      しつぽが九本あるきつね。妖怪

資料『朝鮮民譚集』孫晋泰／郷土研究社

出典『語りの森昔話集—おんちよろちよろ』村上郁再話／語りの森